人世界が舞台

# 日台経済の懸け橋に

日本交流協会台北事務所の初代貿易投資アドバイザー

畠中（はたなか） 則和（のりかず）さん 51

日本の対台湾窓口・交流協会台北事務所で、初めて設置されるという「貿易投資アドバイザー」に今年十一月に就任。日本と台湾の経済交流の橋渡し役を務める。

「日本全国の経済界の目が中国に向かっている現在、台湾独特の特徴や役割も見直すべき。きっと、様々な新発見があり、色々な経済界の要望に応えることができると思う」と張り切る。

中国・台湾とのかかわりは大学時代に中国語を専攻したことにさかのぼる。当時、中国語学科の同級生は三十数人と少なかった。一九七二年に日中共同声明が調印されたものの、あのころの中国は「近くて遠い」という存在でしかなかった。

大学卒業後、大阪の松下電器産業に入社。入社二年目の七六年に台北で二年間の語学研修を行った。昼間に会社で営業のイロハを学び、夜間は地元の大学で中国語を学ぶ――という青春の日々を過ごす。

とはいっても、当時の台湾は国民党の蔣経国政権で戒厳令下にあった。台湾の民主化が進み、政権交代も実現している現在では考えられないことではあるが、日本から届くすべての荷物は検査され、書籍類などは没収。日本の新聞も中国共産党に関する部分は黒色のインクで塗りつぶされていた。

「日本の新聞で中国の全国人民代表大会（全人代＝国会）のことを書いた記事などは真っ黒だった。かろうじて読める部分は『は』『を』などという接続詞だけで、さっぱり内容が分からなくて頭を抱えた」と振り返る。

研修終了後、日本に戻り、七八年に中国の鄧小平氏が来日して松下電器のテレビ工場を訪問した際は、松下幸之助氏に付き添って通訳も務めた。

以来、中国畑一筋で歩み、七九、八〇年の幸之助氏の中国訪問に同行。実績が認められて、八二年に中国南部・広東省広州市の事務所責任者に抜てきされた。

任された仕事の内容は、広東省に電化製品の製造工場を造り、中国側に売り渡すという大事業。「改革開放」に突き進む中国の経済最前線で苦闘して、八五年に無事に契約を完了させて日本に帰国した。

## ■帰国、中国勤務を断り決心■

その後、再び台湾との付き合いが始まる。九一年に台湾松下に赴任。いったん九五年に日本に戻るが、九九年に台湾松下の経営の立て直しを命じられた。経済成長を遂げる中国の台頭を肌で感じつつ、必死に仕事に励むうち、台湾に人脈も広がった。

そして、今年三月に日本帰国を命じられた時、心の中で一大決心をしたという。すでに大阪本社の部長職に出世しており、いずれは中国を統括する北京で思う存分に働かないか、という打診も受けていた。

「知らず知らずのうちに台湾に惚（ほ）れ込んでいたんです。今さら中国に行こうなんて思わなくなった」と語る。サラリーマン人生と決別して今年七月末に退社。その二か月後に台湾に戻り、コンサルタント会社を設立した。

**経歴** 一九五三年、奈良県出身。天理大中国語学科を七五年に卒業後、松下電器産業に入社。台北や広州に駐在後、二〇〇四年七月に同社を退社。台北でコンサルタント会社を経営する。

いま、台湾と日本を往復する忙しい日々が始まっている。中国進出を希望する日系企業があれば、「台湾も見てみて下さい」と売り込み、日本進出を考える台湾企業に対しては、「景気低迷が続きますが、日本も捨てたもんじゃありません」と訴えかけている。

「台湾は成熟した市民社会があり、経営者や労働者の意欲もモラルも日本に負けないぐらいに高い。いまや中国の影に隠れているものの、もっと注目されてよいはず」。日台を結ぶアドバイザーとして、さらなる活躍を期している。

（文・写真 関泰晴）